

の命題や所論を發展させてゐる。例へば、社會主義的構成態生誕の問題、新經濟政策の辨證法、生活様式の發展、新經濟政策の各種段階における生活様式の交互關係、「誰が誰を」の問題の解決、ソ聯邦における社會主義建設の今後の方向などがさうである。工業化の問題、國民經濟再建の問題、勞働生産率發展の條件（六つの條件、再建期における技術の役割と意義、農業の社會主義的改造、階級としてのクラークの撲滅、農業發展の今後の方向等々）を究明して、生産力と生産關係に關するマルクス・レーニン主義の學說を豊かにし、社會主義生産様式に關する完全な理論を作り上げた。これと關聯して、マルクス・レーニン主義の階級闘争論も、スターリンによつて深遠な研鑽を受け、過渡期の各段階における階級闘争の各種形態、階級絶滅と階級なき社會主義社會建設の方向、革命の色々な段階における黨の役割と意義、黨活動の形態や方法等々が明かにされた。

プロレタリア獨裁、プロレタリア獨裁の三つの側面、その強化、ソ聯邦社會主義改造の業におけるプロレタリア獨裁の役目と意義、プロレタリアの同盟軍、民族問題、文化革命、理論闘争の意義、經濟と人々の意識における資本主義殘存物の清算等々について、スターリンはマルクス・レーニン主義の學說を發展させ、同時に、土臺と上部構造との關係に關するマルクス・レーニン

主義の學說をさらに發展させ且つ深めてゐる。一九〇六年に「アハリ・ツホヴレバ」紙と「チヴエニ・ツホヴレバ」紙に發表した初期の論文の中で、すでにスターリンは土臺と上部構造に關するマルクス主義理論を發展させ、形式と内容、生産力と生産關係の辨證法に關する理論を發展させた。「初めに外部の條件が變化し、物質が變化し、次にこれに應じて意識その他の精神現象が變化する——觀念的側面の發達は、物質的條件の發展よりも遅れる。物質的側面、外部の條件、存在等々が内容と言へるなら、觀念的側面、意識その他の現象は、これを形式と呼んでもよい。以上から例の唯物論的命題が生ずる。すなはち、發展の過程において内容は形式に先行し、形式は内容におくれるのである。社會生活についても、これと同じことが云へる。社會生活においても、物質的發展は觀念の發展に先行し、形式は内容におくれる。すでに資本主義が存立してゐて烈しい階級闘争が演ぜられてゐたのに、科學的社會主義はまだどこにもなかつた。生産過程はすでに社會的となつてゐたのに、社會主義思想はまだどこにも起らなかつた。

故にマルクスはかう言つてゐる——「人々の意識が彼等の社會的存在を決定するのではなく、むしろ彼等の社會的存在が彼等の意識を決定する」と（マルクス著「經濟學批判」參照）。このやうに、マルクスの意見によれば、經濟的發展は生活の物質的基礎、その内容であり、法律上、政治

上、宗教上および哲學上の發展は、この内容の「觀念的形式」、その「上部構造」である。故にマルクスはかう言つてゐる——「經濟的基礎の變化と共に、その上部構造も早かれ遅かれ變化する」と（同上参照）。

生活においても、初めに外部の物質的條件が變化し、次に人々の思惟が、彼等の世界觀が變化する。内容の發展が形式の發生と發展に先行する。もちろんこれは、例へばシャー・ゲーに見られるやうに（「ノブ」誌第一號「一元論批判」参照）、マルクスの意見によれば、形式のない内容が可能だといふことを意味しない。形式のない内容は不可能であるが、要は、あれこれの形式が内容よりも遅れるために、その内容と完全に照應することはなく、かくして新しい内容は、往々にて一時、舊い形式をまとうことを「餘儀なくされ」、そのために内容と形式との間に衝突が起るといふことである。今日、例へば、生産の社會的性質は生産物の私有と一致せず、まさしくこれを基礎として、今日の社會的「衝突」が起つてゐる。」⁽¹⁾

(1)「アハリ・ツホヴレバ」紙、一九〇六年六月二十八日、第七號、二二三頁。

エル・ベリリヤの小冊子「裏コーカサスにおけるボルシエヴィキ組織史の問題に寄す」に引用。

スターリンは、トロツキーの永久革命論のメンシエヴィキの本質を摘發し、帝國主義下におけ

る資本主義發展の不等性および一國社會主義建設の可能性に對するカウツキー流の否定を暴露した。反對派との闘争では、一國における社會主義勝利の可能性を理論的に基礎づけ、この學說を全面的に發展させた。さらにスターリンは右翼日和見主義の理論と戰術を檢討して、右翼日和見主義は形式的には一國社會主義勝利の可能性を認めてゐるが、實は社會主義建設の唯一の正しい方途（重工業および機械製作の重點的増進、農業集團化、資本主義要素に對する全面的攻勢等）を否認して、トロツキー主義と落ち合ひ、實は一國社會主義勝利の可能性を否定するものだといふことを教へてゐる。その他、均衡論、階級闘争の右翼日和見主義的抹消論、クラークおよびネップマンが自然に社會主義へと轉じてゆくといふ理論、レーニンの新經濟政策および協同組合計畫に對するブハリンの無理解、國家の問題に對するブハリンの半無政府主義的誤謬等々に對しても、一掃的な批判を加へた。最後にスターリンは、メンシエヴィキ的觀念論に固有なる理論と實踐との背馳、哲學と政治および社會主義建設の緊急問題との乖離、マルクス主義哲學の發展におけるレーニンの段階の否定、プレハノフの誤謬の發展深化を摘出してゐる。戰闘的黨派性とあらゆる種類の日和見主義に對する闘争、これがスターリンの理論的および政治的活動の特徴である。

— 附 —

辯證法的唯物論と歴史唯物論

スターリン

辯證法的唯物論はマルクス・レーニン主義政黨の世界觀である。この世界觀が辯證法的唯物論と稱せられるのは、自然現象に對するその見方、自然現象を研究するその方法、自然現象を認識するその方法が辯證法的であり、その自然現象の解釋、その自然現象の理解、その原理が唯物論的であるからである。

歴史唯物論は、辯證法的唯物論の原理を社會生活の研究の上に擴大したものであり、辯證法的唯物論の原理を社會生活の現象に、社會の研究に、社會の歴史の研究に適用したものである。

マルクスとエンゲルスは彼等の辯證的方法を性格づけて、よくヘーゲルを引合ひに出し、ヘーゲルは辯證法の大綱を定式づけた哲學者だと言つてゐる。しかしこれは、マルクスとエンゲルスの辯證法が、ヘーゲルの辯證法と同じものだといふ意味ではない。事實、マルクスとエンゲルス

はヘーゲル觀念論の殻をはぎ棄てて、ヘーゲルの辨證法から「合理的な核心」のみを取り出し、その辨證法をさらに發展させ、辨證法を現代科學風のものとなしたのである。

「私の辨證法方法は——とマルクスは言つてゐる——實はヘーゲルのそれと異なるばかりでなく、それと正反對のものである。ヘーゲルは思惟過程を理念といふ名の下に一の自立的な主體にさへ變じてゐて、彼にとつては、その思惟過程が現實的なもの造物主であり、現實的なものは、その思惟過程が外部に現れたものに外ならない。これに反して私にとつては、觀念的なものは、物質的なものが人間の頭腦の中に移され、頭腦の中に轉倒されたものに外ならない」(マルクス「資本論」第一卷、第二版序文)。

マルクスとエンゲルスは彼等の唯物論を性格づけて、よくフォイエルバッハを引合ひに出し、フォイエルバッハは唯物論を正當な地位にひき戻した哲學者だと言つてゐる。しかしこれは、マルクスとエンゲルスの唯物論がフォイエルバッハの唯物論と同じものだといふ意味ではない。事實、マルクスとエンゲルスはフォイエルバッハの唯物論から「主要な核心」を取り出し、それをさらに發展させて、唯物論の哲學科學的原理となし、フォイエルバッハの觀念論的な宗教的倫理的粉飾は放り棄ててしまつた。周知の通り、フォイエルバッハは根本的には唯物論者であつた

が、唯物論といふ名前には反對してゐた。エンゲルスが度々述べたやうに、フォイエルバッハは「唯物論的基礎にも拘らず、まだ舊來の觀念論的呪縛から脱し切れなかつた」、「フォイエルバッハの眞の觀念論は、彼の倫理學と宗教哲學とに來ると、直ちに明瞭になつてくる」(マルクス・エンゲルス全集、露語版、第十四卷、六五二—六五四頁)。

辨證法の語源は、「デアレゴ」といふギリシア語からきてゐて、對話を交す、討論をするといふ意味である。古代において辨證法といへば、對手の判斷の中に矛盾を見出し、この矛盾を克服して、眞理を得る術のことであつた。古代の哲學者の中には、思惟に矛盾を發見すること、反對の意見が衝突することが、眞理を明かにする一番よい手がかりだと考へてゐた人々がゐた。この辨證法的な思惟方法が、後に自然現象の上に押し擴げられて、自然認識の辨證的方法となり、自然界の現象は、永遠に運動し變化するものと見られ、自然界の進化は、自然界に存する矛盾の發展の結果であり、自然界における對立力の交互作用の結果だと見られるやうになつた。

辨證法は實は形而上學とは正反對のものである。

一、マルクス主義の辨證的方法を性格づけるものに、次の如き根本特徴がある。

(イ)、形而上學とは反對に、辨證法は自然を以て、相互に切り離された、相互に孤絶した、相互

に依存しない、対象や現象の偶然的な累積とは観らず——この自然は聯關せるもの、全一的なものであつて、対象、現象が有機的に相互に聯關し合ひ、相互に依存し合ひ、相互に制約し合つてゐると観るのである。

故に辨證的方法によれば、自然界における只の一つの現象と雖も、それを孤絶したものととして、周圍の現象との聯關を離れて取り上げれば、決して理解されるものでない。何故なら自然界の任意の領域におけるどんな現象でも、それを周圍の條件との聯關を離れて、周圍の條件から切り離して考察すれば、無意味なものとなつてしまふからである。むしろ反對に、どんな現象でも、それを周圍の現象との不可分なる聯關において考察し、それが周圍の現象に制約されたものと見る時に、はじめて理解され、基礎づけられるのである。

(ロ)、形而上學とは反對に、辨證法は自然を靜止不動の状態、休止不變の状態とは観らず、不斷の運動と變化、不斷の更生と發展の状態として考察し、そこでは常に或る物が發生しては發展し、或る物が亡びては、命數を終ると観るのである。

故に辨證的方法は、諸現象を單にその相互聯關および相互制約性といふ見地から考察するのみならず、諸現象の運動、その變化、その發展といふ見地からも、諸現象の生滅といふ見地からも

考察すべきことを要求する。

辨證的方法にとつて何よりも重要なことは、今の瞬間に確乎不動のものやうに見えるものが、すでに死滅し始めるといふことではなく、たとへ今の瞬間には根據のないものやうに見えても、それが發生し發展しつゝあるといふことである。何故といふに、辨證的方法にとつて犯しがたいものといへば、發生し發展するものだけだからである。

エンゲルスはかう言つてゐる——「自然全體はその極微小部分から至大の物體に至るまで、一粒の砂から太陽に至るまで、プロチスト(原生細胞——スターリン)から人間に至るまで、永遠の生滅、不斷の流轉、絶えざる運動と變化のうちにある」(同上、四八四頁)。

故に辨證法は、物とその概念的反映とを主としてその相互聯關において、その連鎖において、その運動において、その生滅において取り上げる」と、エンゲルスは言つてゐる(マルクス・エンゲルス全集、第十四卷、二二三頁)。

(ハ)、形而上學とは反對に、辨證法は發展の過程を單なる増大の過程とは観らず、微々たる、目に見えない量的變化が、ありありと分る變化へ、根本的な變化へ、質的變化へと移りゆく發展過程と見なすのである。前者の見方にあつては、量の變化は質的變化をきたさないが、後者の見方

にいつては、質の變化は徐々に起るのではなく、急激に、突然に、一の状態から他の状態への飛躍的轉化として起り、偶然的でなく、法則的に起り、瑣々たる徐々の量的變化の蓄積の結果として起るのである。

故に辨證的方法によれば、發展の過程は循環運動として、過ぎ去つたものの單なる反復として解すべきではなく、前進運動として、向上線を進る運動として、舊き質的状态から新しき質的状态への移行として、單純なものから複雑なものへの發展、低きより高きへと向ふ發展として解すべきである。

エンゲルスはかう言つてゐる——「自然界は辨證法の試金石である。そして現代自然科学は、この試金石のために極めて豊富な資料を提供し、その資料は日毎に積みかさねられつゝあるので、自然界の森羅萬象は結局辨證法的であつて、形而上學的ではないこと、自然界は永遠に同一なる、不斷に新たに反復する循環運動を描くのではなく、現實的な歴史を辿りつゝあることを證明した。ここで先づ第一にあげておかねばならぬのはダーウィンである。ダーウィンは、現在の有機界全體、動植物界が、従つてまた人類も、數百萬年に亘る進化過程の所産であることを證明して、形而上學的自然觀に致命的な打撃を加へたのである」(同上)

(二三頁)。

エンゲルスは辨證法的發展を性格づけて、量的變化から質的變化への轉化だとなし、次のやうに言つてゐる——

「物理學にあつては……いづれの變化も量が質へ急變することであり、物體に固有なる、又は物體に傳はる或る形態の運動量の、量的變化の結果である。例へば水の溫度は、最初の間は、水の液狀の流動體に對してはどうでもよいものであるが、液狀の水の溫度が昇るか下るかすると、或る一點に達して、この凝聚状態は質的に變化して、水は蒸氣に變じたり、氷に變じたりする……例へば、白金が光を發するやうになるには、一定の最少限度の電流が必要である。例へば、すべての金屬には、發熱溫度と熔解溫度といふものがある。例へば、すべての液體には、我々が何かの装置を用ひて、適當な溫度を起すことが出來れば、既知の壓力の下で、一定せる氷點と沸騰點とがある。最後に、すべての氣體には、最後の一點といふものがあつて、その點に達すると、適當な壓力と冷却を加へれば、氣體は變じて流動體となる……物理學の謂ゆる常數といふもの(一の狀態が他の狀態に變ずる一點——スターリン)は、その大部分が次の如き結節點を言ひ表したものに外ならない、すなはち、この結節點に來る

と、運動の量的（變化）増減が、當の物體の状態に質的變化を喚び起し、従つて量が質へ一變するのである」（同上、五二七—五二八頁）。

續いてエンゲルスは化學へ論を移し、次のやうに述べてゐる——

「我々は化學を名づけて、量的構成が變化する結果、物體に生ずる質的變化に關する學だと云ふことが出来る。ヘーゲル自身にもこれはすでにわかつてゐた。……酸素を例に取つて見よ。一個の分子に、普通の場合の如く二個の原子でなく、三個の原子を化合させると、オゾンが生じ、その香氣と作用とが普通の酸素とは全く異なる物體が生ずる。これこそ、酸素が窒素と化合したり、硫黄と化合したりする、それぞれ異なる比例なのであつて、その比例を異にする毎に、他のすべての物體とは質的に異なる物體が生ずるのである」（同上、五二八頁）

最後にエンゲルスは、デューリングがヘーゲルにあたり散らしながら、内々そのヘーゲルから感覺のない世界から感覺の世界への、無機界から有機界への轉化は、新しい状態への飛躍であるといふ、例の有名な命題を剽竊してゐるのを批判して、次のやうに言つてゐる——

「これはヘーゲルの謂ゆる質量關係の結節點であつて、單なる量的増減は、一定の結節點へくると、質的飛躍を惹き起すのである。例へば、水を熱したり冷却したりする場合には、沸騰點と氷點とがこの結節點であり、この點へくると——正常の壓力の下では——新しい凝聚状態への飛躍が起る、すなはち、量は一變して質となるのである。」（同上、四五—四六頁）

(二) 形而上學とは反對に、辨證法は次の點から發足する。すなはち自然の對象、自然現象は、否定的側面と肯定的側面、既往と未來、命數を終る側面と發展しゆく側面とを有してゐるのだから、自然界の對象や現象には、すべて内的矛盾が固有してゐるといふこと、この對立の鬭争、舊きものと新しきものとの、死滅しゆくものと生れ出づるものとの、命數を終るものと發展しゆくものとの鬭争が、發展過程の内的内容をなし、量的變化の質的變化への轉化の内的内容をなすとすふことこれである。

故に、辨證的方法によれば、低きより高きへと向ふ發展の過程は、諸現象が調和を保つて展開するといふ風に行はれるのではなく、對象なり現象なりに固有なる矛盾が露出することによつて、この矛盾に基いて作用する對立的傾向の「鬭争」によつて起るのである。

「本來の意味で辨證法といへば、對象の本質そのものに、ひそむ矛盾を研究することである」

とレーニンは言つてゐる（レーニン「哲學ノート」、二六三頁）。

さらに曰く——

「發展とは對立の『鬭争』である」と（レーニン全集第十三卷、三〇一頁）。

以上が簡短ながらマルクス主義の辨證的方法の根本特徴である。

この辨證的方法の原理を社會生活の研究の上に、社會の歴史の研究の上に擴大したことが、如何ばかり大きな意義のあるものか、以上の原理を社會の歴史に、プロレタリア黨の實踐的活動に適用したことが、如何ばかり大きな意義のあるものかは、容易に分ると思ふ。

この世界に孤絶した現象といふものがなく、一切の現象が相互に關連し合ひ、相互に制約し合つてゐるとすれば、歴史上における如何なる社會制度も、如何なる社會的運動も、歴史家によく見られるやうに、「永遠の正義」とか、何かその他の先入觀念といつたやうなものから、これをかれこれ論すべきではなく、その社會制度なり、その社會的運動なりを生み出した條件、その社會制度や社會的運動がこれと繋がつてゐる條件から、これを研究すべきである。奴隸制度といふものは、今日から見れば、言語同斷な制度であり、天理に反する馬鹿げた制度であるが、その奴隸制度も原始共產制度の崩壊といふことを條件とすれば、全く當り前の合法的な現象である。何故といふに、奴隸制度も原始共產制度に比較すれば、一の前進を意味するものだからである。

ブルジョア民主主義共和制といふ要求は、ツァーリズムとブルジョア社會の存立といふことを

條件とすれば、謂はば一九〇五年のロシアでは、全く當然の、正當なる革命的要求であつた。ブルジョア共和制は當時は一の前進を意味したからである。ところが、ソヴェト聯邦現下の條件からすれば、ブルジョア民主主義共和制といふ要求は、言語同斷な反革命的要求である。何故といふに、ブルジョア共和制はソヴェト共和國に比較すれば一の逆轉だからである。

萬事は條件次第であり、處と時の如何にかかつてゐる。

社會現象に對するかうした歴史的な見方がなければ、歴史學の成立も發展も不可能なことはわかりきつてゐる。すなはち、かうした見方をとつてこそ、初めて歴史學は混沌たる偶然性の中に迷ひ込むことを免れ、馬鹿げ切つた錯誤の堆積に陥らないのである。

さらに、この世界が不斷の運動と發展の中にあり、舊きものの死滅と新しきものの生誕とが發展の法則であるなら、もはや「確乎不動なる」社會秩序といふものも、私有財産と搾取の「永遠の原理」も、農民は地主に隷屬し、労働者は資本家に服従すべきだといふ、「永遠の理念」もなごことは明かだ。

すなはち、かつて資本主義制度が封建制度に取つて代つたやうに、資本主義制度もいづれば社會主義制度に代るのである。

すなはち、たとへ現在は優勢な力であるにしろ、もうこれ以上発展しない社會層に方角をつけるべきではなく、たとへ現在は優勢な力ではないにしろ、今後発展し、未來を有する社會層に方角をつけるべきである。

前世紀の八十年代、マルクス主義者が人民派（ナロードニキ）と闘つてゐた時代には、ロシアのプロレタリアは、人口の大多數を占めてゐた個人經營農民に比すれば、言ふに足りない少數であつた。ところが、農民は階級として分解してしまつたのに、プロレタリアは階級として發達して行つた。そしてプロレタリアが階級として發達して行つたからこそ、マルクス主義者はプロレタリアに方角をつけたのである。マルクス主義者はあやまたなかつた。プロレタリアがその後増強して、言ふに足りなかつた勢力から、歴史的にも政治的にも第一等の勢力となつたことは、周知の通りである。

すなはち、政治をあやまらないやうにするには、前方を見るべきで、後ろを見てはならない。さらに、漸次的な量の變化が急激な突然の質的變化へ移りゆくことが、發展の法則であるとするならば、被壓迫階級の手になる革命的變革が、全く自然的で、避けがたい現象であることは明かだ。すなはち、資本主義から社會主義へと移りゆくこと、労働者階級が資本主義的壓制から解放さ

れることは、漸次的な變化によつては、改革によつては實現されず、資本主義制度の質的變化によつてのみ、革命によつてのみ實現されるのである。

すなはち、政治をあやまらないやうにするには、革命家となるべきであつて、改良主義者となつてはならない。

さらに、發展が内的矛盾の露出によつて、その矛盾を基礎とする對立力の衝突によつて起り、かくして、この矛盾が克服されてゆくとすれば、プロレタリアの階級闘争が全く自然的で、避けがたい現象であることは明かだ。

すなはち、資本主義秩序の矛盾を蔽ひかくすべきではなく、その矛盾を摘發し、解きほどくべきであり、階級闘争をもみ消すべきではなく、階級闘争を最後まで押し進むべきである。

すなはち、政治をあやまらないやうにするには、一步も譲らない階級的プロレタリア政治を貫き通すべきであつて、プロレタリアとブルジョアとの利害の協調といふ、改良主義的政治を行ふべきではなく、資本主義の社會主義への「轉生」といふ、妥協的政治を行ふべきではない。

マルクス主義の辨證的方法を社會生活に適用し、社會の歴史に適用してみると、以上のやうなことになる。

マルクス主義の哲學的唯物論はどうかといふに、それは實は哲學的觀念論と眞向から相反してゐる。

二、マルクス主義の哲學的唯物論を性格づけるものに、次の如き根本特徴がある。

(イ)、觀念論はこの世界を以て、「絶対理念」、「世界精神」、「意識」の具現體だとなすのであるがかういふ觀念論とは反對に、マルクスの哲學的唯物論は次のことから發足する。すなはち、この世界はその本性から云つて物質的であり、この世界における多種多様な現象は、運動する物質のさまざまな形態であること、辨證的方法によつて突きとめられる、諸現象の相互聯關と相互制約性とは、運動する物質の發展の合法性をなしてゐること、世界は物質運動の法則に従つて發展してゐるのであつて、「世界精神」などといふものは必要としないといふことである。

エンゲルスはかう言つてゐる——「唯物論的世界觀とは、外部から何も附け加へず、自然をあるがまゝに解釋することである」(マルクス・エンゲルス全集、第十四卷、六五一頁)。

古代ギリシア哲學者のヘラクレイトスによれば、「世界、萬物から成る一者は、神が創つたものでも、人間が造つたものでもなく、過去現在未來の永劫に亘つて、永遠に生きた火であり、合法的に燃えては、合法的に消え失せる火である」といふのだが、この唯物論的自然觀につい

てレーニンはかう言つてゐる。「辨證法的唯物論の端緒の見事な敘述だ」と(レーニン「哲學ノ」ト「三一八頁」)。

(ロ)、觀念論の主張するところでは、實在的に存在するものは我々の意識だけであり、物質界、存在、自然は、我々の意識の中のみ、我々の感覺、表象、概念の中のみ存在するといふのだが、かういふ觀念論とは反對に、マルクス主義の哲學的唯物論は次のことから發足する。すなはち、物質、自然、存在は、意識の外に、意識とは係りなく存在する客觀的實在性であること、物質は感覺や表象や意識の根因であるから、物質が第一次的なもので、意識は物質の映像、存在の映像であるから、意識は第二次的なものであること、思惟は物質の所産であつて、物質の發展中に最高度の完成に達したもの、つまり頭髓の所産であり、そしてこの頭髓が思惟の器官であること、従つて大變な誤謬に陥りたくなければ、思惟を物質から切り離してはならないといふことである。

エンゲルスはかう言つてゐる——「あらゆる哲學の最高問題は、思惟と存在、精神と自然との關係如何といふ問題である……この問題に對する答へ方如何によつて、哲學者たちは二大陣營に分れた。精神が自然よりも以前に存在したと主張する哲學者たちは、……觀念論的

陣營を構成した。これに反して、自然を始元と見なした哲學者たちは、唯物論のいろいろな學派に屬した」(マルクス選集第一卷、三二九頁)。

さらに曰く——

「我々自身がその一部のだが、感覺によつて知覺される物質界が、唯一の現實的な世界であつて、我々の意識と思惟とは、それが如何に超感覺的なものに見えても、一の物質的な肉體器官たる腦髓の所産なのである。物質が精神の所産ではなく、むしろ精神そのものは物質の最高所産に外ならないのである」(同上、三三二頁)。

物質と思惟との問題について、マルクスはかう言つてゐる——

「思惟を思惟する物質から切り離してはならない。物質が萬物變化の主體である」(同上、三〇二頁)。

レーニンはマルクス主義の哲學的唯物論を性格づけて、かう言つてゐる——

「そもそも唯物論なるものは、意識、感覺、經驗とは係りのない、客觀的に實在的な存在(物質)を認める……意識は……存在の反映にすぎず、ただか近似的に忠實な(十全的な、觀念的に正確な)物質の反映たるにすぎない」(レーニン全集、第十三卷、二六六—二六七頁)。

さらに曰く——

「物質とは、我々の感覺器官に作用して、感覺を喚び起すものである。物質とは、我々の感覺に與へられてゐる客觀的な實在性である……物質、自然、存在、物的なものが、第一次的なものであり、精神、意識、感覺、心的なものは、第二次的なものである」(同上、一一九—一二〇頁)。

「世界像とは物質が運動する姿であり、『物質が思惟する』姿である」(同上、二二八頁)。

「腦髓は思惟の器官である」(同上、二二五頁)。

(ハ)、觀念論は世界とその合法則性の認識の可能性を疑ひ、我々の知識の確實性を信せず、客觀的眞理を認めずに、この世界には、何時になつても科學によつては認識されない、「物自體」が充満してゐると見做すが、かういふ觀念論とは反對に、マルクス主義の哲學的唯物論は、次のことから發足する。すなはち、世界とその合法則性とは十分に認識されるものであり、實驗、實踐によつて試された自然法則に關する吾人の知識は、客觀的眞理といふ意義を有する確實なる知識であること、この世界には認識されない物はなく、まだ認識されてゐない物があるだけで、その物もやがては科學と實踐の力によつて發見され認識される、といふことこれである。

エンゲルスは、この世界は認識され得ない、「物自體」は認識され得ないといふ、カントその他の觀念論者の説を批判し、我々の知識の確實性を主張する唯物論の有名な命題を守つて、次のやうに書いてゐる——

「その他すべての哲學的虛妄に對する場合と同じく、この種の哲學的虛妄に對する最も斷乎たる反駁は、實踐、すなはち實驗と産業である。我々が或る自然現象に關する吾人の見解の正しいことを證明するのに、我々自身がその自然現象を作り出し、そのものの諸條件からそれを發生させ、あまつさへ、それを我々の目的に役立てるやうにすれば、得體の知れないカントの『物自體』は立ちどころに片づいてしまふ。動植物の體内に作られる化學的物質は、有機化學がさういふものを次々に調製するやうになるまでは、依然としてかういふ『物自體』であつた。有機化學がこれを調製するやうになつた時、『物自體』は『我々のための物』となつた。例へば茜（アカネ）の色素アリザリンがさうであつて、今ではもうアリザリンは野原に生える茜草の根からは取らず、はるかに廉價に簡單にコールタールから製造されてゐる。コペルニクスの太陽系は三百年の間假説であつた、十中八九までは間違ひのないものであつたが、やはり假説であつた。しかるにルウェリエが、コペルニクス體系によつて與へられた

事實に基き、未知の一遊星が必ず存在せねばならぬことを證明したばかりでなく、その遊星が天體空間に占める場所をも算定し、ついでガレがその遊星を實際に發見したとき、コペルニクスの體系が證明されたのである」（マルクス選集、第一卷、三三〇頁）。

レトニンは、ボグダノフ、バザロフ、ユシニケヴィチその他のマツハ主義者の信仰主義（科學よりも信仰を重んずる反動學說）を非難攻撃し、自然の法則性に關する我々の科學的知識は確實なるものであり、科學の法則は客觀的眞理であるといふ、例の命題を擁護して、次のやうに言つてゐる——

「現代の信仰主義は科學は決して否認しない。ただ科學の『法外な要求』、つまり客觀的眞理に對する要求を否認するだけだ。客觀的眞理なるものが存在し（唯物論者がさう考へるやうに）、そしてただ自然科學のみが、外界を人間の『經驗』の中に反映して、客觀的眞理を我々に與へる能力があるとすれば、すべて信仰主義は無條件に打ち破られてしまふ」（レトニン全集第十三卷、一〇二頁）

以上が簡短ながらマルクス主義の哲學的唯物論の性格的特徴である。

哲學的唯物論の原理を社會生活の研究の上に、社會史の研究の上に擴大したことが、如何ばか

り大きな意義があるか、その原理を社會の歴史に、プロレタリア黨の實踐的活動に適用したことが、如何ばかり大きな意義があるかは容易にわかる。

自然現象の聯關とその相互制約性とは、自然界進化の合法則性をなしてゐるとすれば、このことから、社會生活の諸現象の聯關と相互制約性も、同じく偶然的な事柄ではなく、社會發展の合法則性をなしてゐる、といふことが結論される。

すなはち、社會生活、社會の歴史は『偶然性』の堆積ではなくなる。何故といへば、社會の歴史は社會の合法則的發展となり、社會史の研究は科學となるからである。

すなはち、プロレタリア黨の實踐的活動は、「えら方」の仇なる望みを本とすべきでも、「理性」の要求や「普遍的道德」等々を本とすべきでもなく、社會發展の合法則性を、この合法則性の研究を本とすべきである。

さらに、世界が認識せられ、自然の發展法則に關する我々の知識が、客觀的眞理といふ意義を有する確實な知識であるとすれば、このことから、社會生活、社會の發展も同じく認識せられ、社會の發展法則に關する學によつて與へられたものは、客觀的眞理といふ意義を有する確實な事件である、といふことが結論される。

すなはち、社會の歴史に關する學は、社會生活の現象が極めて複雑なものであるにも拘らず、謂はば生物學と同様の精密科學となり、社會發展の法則を實用に供し得る科學となる。

すなはち、プロレタリア黨の實踐的活動は、何か偶然的な動機によつて導かれるべきではなく、社會發展の法則によつて、この法則から引き出される實踐的結論によつて導かれねばならぬ。

すなはち、社會主義は人類のより善き未來に關する空想から變じて一の科學となるのである。

すなはち、科學と實踐的活動との聯結、理論と實踐との聯結、兩者の統一は、プロレタリア黨の導きの星とならねばならぬ。

さらに、自然、存在、物質的世界が第一次的なもので、意識、思惟が第二次的なもの、派生的なものであるとすれば、そして物質界が、人々の意識とは係りなく存在する客觀的實在性であつて、意識はこの客觀的實在性の映像であるなら、このことから次のことが結論される。すなはち、社會の物質的生活、社會の存在も同じく第一次的なものであり、社會の精神生活は第二次的なもので、派生的なものであること、社會の物質的生活は、人々の意志とは係りなく存在する客觀的實在性であつて、社會の精神生活はこの客觀的實在性の反映であり、存在の反映であるといふこ

となる。

すなはち、社會の精神生活の依つて成立する根元、社會的觀念、社會理論、政治的見解、政治制度の發生する根因は、觀念そのもの、理論そのもの、政治的見解そのもの、政治制度そのものにこれを求めるべきではなく、社會の物質的生活の條件に、社會的存在にこれを求むべきであり、觀念や理論や政治的見解等々は、この社會的存在の反映に外ならないのである。

すなはち、社會史の各時代に、それぞれ異つた社會的觀念や理論、政治的見解や政治制度が見られ、奴隸制度の下では、斯々の社會的觀念や理論、政治的見解や政治制度が見られ、封建制度の下では斯々のものがあり、資本主義の下では斯々のものがあるのは、觀念そのもの、理論そのもの、政治的見解そのもの、政治制度そのものの「本性」からは、その「屬性」からは説明されず、社會的發展のそれぞれ異なる時代における社會の物質的生活のそれぞれ異なる條件から説明されるのである。

社會の存在が斯々であり、社會の物質的生活の條件が斯々であれば、その社會の觀念、理論、政治的見解、政治制度も斯々である。

これについてマルクスはかう言つてゐる――

「人間の意識が彼等の存在を決定するのではなく、むしろ反對に、人間の社會的存在が彼等の意識を決定するのである」(マルクス選集、第一卷、二六八頁)

すなはち、政治をあやまらず、夢想家の立場に陥らないやうにするには、プロレタリア黨の活動は、抽象的な「人間理性の原理」を本とすべきではなく、社會的發展を決定する力としての、物質的社會生活の具體的條件から發足すべきであり、「えら方」の仇なる望みを本とせず、物質的社會生活の發展の實在的要請から發足すべきである。

人民派、無政府主義者、社會革命黨員を含めて、すべて空想主義者がくづれ去つたのは、なかでも、彼等が社會の發展における物質的社會生活の諸條件の主導的役割を認めず、觀念論に陥つて、その實踐的活動をば、物質的社會生活の發展の要請に基いて打ち立てず、むしろそれとは關係なく、それに反して、實在的社會生活から遊離した「理想案」、「一切を包括する計畫」を基礎として、これを編み出したからである。

マルクス・レーニン主義の力と生動性とは、その實踐的活動が取りも直さず物質的社會生活の發展の要請に立脚し、如何なる場合にも、實在的な社會生活から遊離しないといふ點にある。

しかしながら、マルクスの以上の言葉から、社會的觀念や理論、政治的見解や政治制度は、社

會生活には何んの意義もないとか、それらのものは社會的存在の上には、社會生活の物質的條件の發展には反作用を及ぼさないとか、さういふことは決して結論されない。今のところ我々は、社會的觀念や理論、政治的見解や政治制度の起源、その發生といふことを論じてゐるのであり、社會の精神生活は社會の物質的生活條件の反映であるといふことを言つてゐるにすぎない。社會的觀念や理論、政治的見解や政治制度の有する意義といふもの、これらのものが歴史上に演ずる役割といふものを、歴史唯物論は否定しないばかりでなく、むしろ反對に、社會生活における、社會の歴史における、それらのものの重要な役割と意義を強調するのである。

社會的觀念や理論にはいろいろなものがある。舊い觀念や理論で、すでに時勢におくれ、衰微する社會勢力の利益にしか役立つたぬものもある。かうした舊思想の意義といへば、それが社會の發展を阻害し、社會の前進を阻むところにある。また新しい進歩的な觀念や理論で、進歩的な社會勢力の利益に役立つものもある。かうした新思想の意義といへば、それが社會の發展、社會の前進を助成することである。しかもこの新思想は、物質的社會生活の發展の要請を正確に反映すればするほど、多大の意義を帯びてくるのである。

新しい社會的觀念や理論は、物質的社會生活の發展が社會の前に新しい問題を提出してから後

に初めて發生する。しかし、新しい社會的觀念や理論が一旦發生すると、それは極めて重大な力となり、物質的社會生活の發展によつて提起された、新しい問題の解決を助け、社會の前進を助ける力となる。新しい觀念、新しい理論、新しい政治的見解、新しい政治制度に、組織し、動員し、改造するところの絶大な意義があるといふことは、まさしくこの點に現れてくるのである。元來、新しい社會的觀念や理論が發生するのは、それが社會にとつて必要であり、組織し、動員し、改造するその作用がなければ、物質的社會生活の發展に關する、すでに成熟した問題を解決することは不可能だからに外ならない。物質的社會生活の發展によつて提起される、新しい問題を土臺として發生した、新しい社會的觀念や理論は、それ自身の道を進んで、人民大衆の資産とたり、衰微しゆく社會勢力に對して、人民大衆を動員し、彼等を組織し、かくして、物質的社會生活の發展を阻害するところの、衰微しゆく社會勢力の覆滅を助成する力となる。

このやうに、社會的觀念や理論、政治制度が、物質的社會生活の發展、社會的存在の發展に關する成熟した問題を基礎として發生すると、次にはみづから社會的存在の上に、物質的社會生活の上に影響を及ぼし、物質的社會生活に關する成熟した問題の解決を究極まで押し進め、社會生活の一層の發展を可能ならしめるために必要な條件を作り出すのである。

これについてマルクスはかう言つてゐる――

「理論が大衆の間に普及するや否や、それは一の物質力となる」と（マルクス・エンゲルス全集、第一巻、四〇六頁）。

すなはち、物質的社會生活の條件に働きかけて、社會生活の發展を促進し、その改善を促進し得んがためには、プロレタリア黨は、物質的社會生活の發展の要請を正しく反映し、それ故に廣汎な人民大衆を動かし、人民大衆を動員することが出来、その人民大衆の中から、反動勢力の粉碎を決意せるプロレタリア黨の大軍を組織し、進歩的社會勢力の進むべき道を切り拓く、さういふ社會的理論、さういふ社會的理念に準據しなければならぬ。

「經濟主義者」やメンシェヴィキがくづれ去つたのは、なかでも彼等が、動員し、組織し、改造するところの、進歩的理論や進歩的觀念の役割を認めず、俗流唯物論に陥つて、その役割を零にひとしいものとなしてしまひ、従つて黨を消極的立場に追ひやり、生醉無爲の状態に墮せしめたからである。

マルクス・レーニン主義の力と生動性とは、それが物質的社會生活の發展の要請を正しく反映する進歩的理論に準據し、その理論をそれにふさわしい高所へと引き上げ、愈々の日まで、動員

し組織し、改造する理論の力を用ゆることを、己が義務となすところにある。

社會的存在と社會的意識、社會の物質的生活の發展條件と精神的生活の發展條件との關係如何といふ問題を、歴史唯物論ばかういふ風に解決する。

まだ問題がある。社會の相、社會的觀念や政治的見解や政治制度等々を究極において決定するところの、「物質的社會生活の條件」といふことは、歴史唯物論の見地からすれば、どう解釋すべきかといふ問題がそれである。

實際、「物質的社會生活の條件」とは如何なるものか、その差別的特徴はどんなものか？

確かに、「物質的社會生活の條件」といふ概念の中にはいるものとしては、先づ第一に、その社會を取り巻く自然、地理的環境がある。この地理的環境は、物質的社會生活の必須的な不變の條件の一つであつて、それはもちろん社會の發展に影響を及ぼす。地理的環境が社會の發展上演する役割はどんなものか？ 地理的環境は、社會の相、人類の社會制度の性格、一つ制度から他の制度への推移を決定する主要な力ではないのか？

歴史唯物論はこの問題に對して否と答へる。地理的環境が社會發展の必須的な不變の條件の一つであることは確かであり、それはもちろん社會の發展に影響を及ぼし、社會發展の進行を速め

たり、おくらせたりするが、しかし、社會の變化發達は、地理的環境の變化發達よりも比較にならぬほど急速に起るので、地理的環境の影響は、規定的影響ではない。ヨーロッパでは、三千年間に三つの異なる社會制度、すなはち原始共產制度と奴隸制度と封建制度とが移り代り、東部ヨーロッパのソヴェト聯邦では、第四の社會制度さへ移り代つた。ところが、この三千年間にヨーロッパの地理的條件には全然變化がなく、變化があつても極めて微々たるもので、地理學が變つたと言へないほどのものである。これは當然のことで、地理的環境にいくらでも重大な變化が起るためには、何百萬年といふ歳月が必要であるが、しかるに人類の社會制度に重大な變化が起るのにさへ、數百年、或ひは數千年の歳月があれば十分である。

以上から結論されることは、地理的環境は社會的發展の主因、その規定的原因とはなり得ないといふことである。何故なら、數萬年間に亘つて殆んど變化うないものは、數百年間に根本的變化をとげるものの發展の主因とはなり得ないからである。

さらに、人口の増加、斯々の人口密度も、「物質的社會生活の條件」といふ概念の中にはいることは言ふまでもない。人間は物質的社會生活の條件の必須的な要素をなすものであり、一定の最少限度の人口がなければ、如何なる物質的社會生活もあり得ないからである。人口の増加は

人類の社會制度の性格を決定する主動力ではないのか？

歴史唯物論はこの問題に對しても同じく否と答へる。

もちろん、人口の増加は社會的發展の上に影響を及ぼし、社會的發展を速めたり、おくらせたりするが、しかし社會發展の主動力となることは出來ず、社會的發展に及ぼす人口増加の影響は、規定的影響とはなり得ない。人口増加そのものは、何故に所興の社會制度が斯々の新しい制度に移り代つて、他の何か別な制度に移り代らないのか、何故に原始共產制度が外ならぬ奴隸制度に移り代り、奴隸制度が封建制度に、封建制度がブルジョア制度に移り代つて、他の何か別な制度に移り代らないのか、かういふ問題を説くべき鍵を與へないからである。

人口増加といふことが社會的發展を規定する力であれば、より高い人口密度は、必ずそれに應じてより高次の社會制度を生み出さねばならぬ筈だが、しかし實際にはさういふことは見られない。支那の人口密度は、北米合衆國の人口密度よりも四倍も高いけれども、社會的發展といふ見地からすれば、北米合衆國は支那よりもずっと進んでゐる。支那にはまだ半封建的制度が専ら行はれてゐるのに、北米合衆國の方はもうとつとくに資本主義最高の發展段階に達したからである。ベルギーの人口密度は、北米合衆國よりも十九倍も高く、ソヴェト聯邦に比すれば二十六倍も高

いけれども、社會的發展といふ見地からすれば、北米合衆國の方がベルギーよりも高く、ベルギーは優に歴史上の一時代もソヴェト聯邦におくれてゐる。ベルギーには資本主義制度が専ら行はれてゐるのに、ソヴェト聯邦の方はすでに資本主義と手を切つて、社會主義制度を樹立したからである。

以上から結論されることは、人口増加は、社會制度の性格、社會の相を決定する、社會發展の主動力ではなく、また主動力とはなり得ないといふことである。

さうだとすれば、物質的社會生活の條件の體系において、社會の相を決定し、社會制度の性格一つの制度から他の制度への社會的發展を決定する主動力は、一たいどこにあるのか？

歴史唯物論がさういふ主動力と見なすものは、人類の生存に必要な生活資料を得る方途、食糧や衣服、履物、住居、燃料、生産要具など、社會が生きて行けて發達する上に必要な物質財の生産様式といふことである。

生きてゆくためには、食糧や衣服や履物や住居や燃料などを持たねばならず、これらの物質財を得るためには、それを生産しなければならず、また物質財を生産するためには、生産要具を持ち、それを用ひて、食糧や衣服や履物や住居や燃料などを生産し、その生産要具を造ることを能

くし、生産要具を使ふことを能くしなければならぬ。

物質財の生産に用ひられる生産要具、一定の生産經驗と労働熟練とによつて生産要具を動かす物質財の生産を行ふ人間——これらすべての要素が一緒になつて、社會の生産力といふものを構成する。

しかし生産力は、生産の一側面、生産様式の一側面にすぎず、物質財の生産のために使用される、自然の對象又は自然力に對する、人間の關係を表現する一側面にすぎない。生産のもう一つの側面、生産様式のもう一つの側面をなすものに、生産過程における人間相互の關係、人間の生産關係といふものがある。人間は自然と闘ひ、物質財生産のために自然を利用するが、互ひに離ればなれになつて、相互に縁もゆかりもない一個人としてではなく、共同に、集團をなして、社會をなして生産するのである。故に生産といへば、何時、如何なる條件の下でも社會的生產である。人間は物質財の生産を行ひながら、相互の間に、生産の中で何らかの相互關係、何らかの生産關係を結ぶのである。かうした關係は、搾取を受けない人々の共働、相互扶助の關係であることもあれば、支配と服従との關係であることもあり、最後に、一つの形態の生産關係から他の形態への過渡的關係であることもあるが、生産關係がどんなものであつても、それは——何時、如

何なる制度の下でも——社會の生産力と同様に、なくてはならぬ生産要素である。

マルクスはかう言つてゐる——「生産において人類は自然に働きかけるばかりでなく、相互に働き合ふのである。人間は共同に働き合ひ、その活動を相互に交換し合ふために、何とか一緒に集まつて、はじめて生産するのである。生産するためには、人間は相互に一定の關係を結び、この社會的關係を通じて、はじめて自然に對する人間の働きかけが行はれ、生産が行はれるのである」(マルクス・エンゲルス全集、第五卷、四二九頁)。

従つて生産といひ、生産様式といふものは、社會の生産力と人々の生産關係とを共に包括してゐるので、物質財の生産過程において兩者の統一を具現したものである。

生産といふことの特質の、一つは、それが長い期間に亘つていつまでも一點にとどまつておらず常に變化發展しつゝあり、しかも生産様式に起る變化が、社會的觀念やら政治的見解やら政治制度など、社會制度全般の變化を必然的に喚び起し、すべて社會的風習や政治的風習の改造を喚び起すといふ點にある。人類は種々異なる發展段階にあつて、いろいろ異つた生産様式を用ゆる、もつとがつて云へば、いろいろ異つた生活の仕方をする。原始共產社會の下では、斯々の生産様式があり、奴隸制度の下では、これとは別な生産様式があり、さらに封建制度の下では、違つ

た生産様式がある。これに應じて、人類の社會制度も、人々の精神生活、彼等の物の考へ方、彼等の政治制度も、いろいろさまざまである。

社會の生産様式が斯々であれば、社會そのものも大體に斯々であり、社會の觀念や理論、政治的見解や政治制度も斯々である。

もつとがつて云へば、人々の生活の仕方が斯々であれば、彼等の物の考へ方も斯々である。これは、社會發展の歴史が何よりも先づ生産發展の歴史であり、幾世紀かの間に相互に移り代る生産様式の歴史であり、生産力と人々の生産關係の發展の歴史であるといふことを意味する。すなはち、社會的發展の歴史は、同時に物質財の生産者自身の歴史であり、生産過程の主要な力であつて、社會の存立に必要な物質財の生産を實行する、働く大衆の歴史である。

すなはち、歴史學にして苟も本當の科學であらうとすれば、もはや社會發展の歴史を王様や武將の行動に歸したり、國家の「侵略者」や「征服者」の行動に歸したりしてはならず、先づ第一に、物質財の生産者の歴史、働く大衆の歴史、人民の歴史を研究しなければならぬ。

すなはち、社會史の法則を研究するための鍵は、人々の頭に、社會に關する見解や觀念にそれを求めるべきではなく、各所與の歴史的時代に社會が實踐する生産様式に、社會の經濟にこれを

求めねばならぬ。

すなはち、生産の法則、生産力と生産関係の發展法則、社會の經濟的發展の法則を研究し發見することが、歴史學の第一の課題である。

すなはち、プロレタリアの黨にして苟も本當の政黨であらうとすれば、何よりも先づ生産の發展法則の知識を持ち、社會の經濟的發展法則の知識を持たねばならぬ。

すなはち、政治をあらゆるやうにするには、プロレタリアの黨は、その綱領を作成するにも、その實踐的活動を企てるにも、先づ第一に生産の發展法則から發足し、社會の經濟的發展法則から發足しなければならぬ。

生産といふことの第二の特質は、その變化發達が常に生産力の變化發達から始まり、先づ第一に、生産要素の變化發達から始まるといふ點にある。従つて生産力は最も可動的で最も革命的な生産要素である。初めに社會の生産力が變化發達し、次にこの變化につれて、それに應じて、人の生産關係、人々の經濟關係が變化する。しかしこれは、生産關係が生産力の發達に影響を及ぼさず、生産力は生産關係に依存しないといふ意味ではない。生産關係は生産力の發展につれて發達しながら、今度は逆にその生産關係が生産力の發達に作用し、その發達を速めたり、おくら

せたりする。これについて一言しておかねばならぬのは、生産關係が生産力の性質と状態に一致し、生産力の發展に餘地を與へる場合に、はじめて生産力は十分に發達するのだから、生産關係はあまり長期に亘つて生産力の増進におくれ、生産力と矛盾することは出来ないといふことである。故に、生産關係がどんなに生産力の發達におくれてゐても、それは早かれおそかれ、生産力の發達水準と、生産力の性質と一致するやうにならねばならず、實際にまた一致してゆくのである。さうでなければ、生産體制における生産力と生産關係との統一が根本から破れ、全體としての生産の破裂、生産の危機、生産力の破壊が起る。

生産關係が生産力の性質と一致しない一例、兩者の衝突の一例は、資本主義諸國に見られる經濟恐慌であつて、恐慌の際には、生産手段に對する資本制私有といふことが、生産過程の社會的性質、生産力の性質と大變な不一致に陥るのである。生産力の破壊を招く經濟恐慌は、かうした不一致の結果であるが、しかもこの不一致そのものは、社會革命の經濟的基礎をなすものである。その社會革命の使命とするところは、現今の生産關係を破壊し去り、生産力の性質に一致する、新しい生産關係を創造することである。

これとは反對に、生産關係が生産力の性質と完全に一致してゐる實例は、ソヴェト聯邦におけ

る社會主義的國民經濟である。すなはちソヴェト聯邦では、生産手段に對する社會的所有が、生産過程の社會的性質と完全に一致してゐるので、そのために經濟恐慌も起らなければ、生産力の破壊といふこともない。

従つて生産力なるものは、最も可動的で最も革命的な生産要素たるばかりではない。それは同時に生産發達の規定的要素である。

生産力が斯々であれば、生産関係も斯々でなければならぬ。

如何なる生産要件によつて、人々がその必要とする物質財を生産してゐるか、といふ問題に答へるのが、生産力といふことであるが、生産関係といふと、これはもう別な問題に答へるのである。すなはち、生産手段（土地、森林、水、地下資源、原料、生産要件、工場建物、交通機關、通信機關その他）は誰れが持つてゐるか、生産手段は誰れが管理してゐるか、社會全體の管理になつてゐるか、それとも、各個人や集團や階級がこれを管理してゐて、他の個人や集團や階級を搾取するために、生産手段を用ひてゐるのか。

古代から現代に至るまでの生産力發展の鳥瞰圖は次の通りである。粗末な石器から弓矢へと移り、それにつれて、狩獵生活様式から動物の馴養と原始牧畜へ移つて行つたこと。石器から鐵器

（鐵斧、鐵犁の附いた犁その他）へと移り、それにつれて、植物栽培と農業へ移つて行つたこと。資材加工鐵器がさらに改良せられ、鍛冶輔（ファイゴ）へと、陶器製造へと移り、それにつれて、手工業が發達し、手工業が農業から分れ、獨立手工業生産が起り、次に問屋制手工業が發達したること。手工生産要件から機械へと移り、次に問屋制手工業生産が機械的工業となつたこと。機械生産組織へと移り、機械化された現代的大工業が出現したこと。以上が甚だ不完全ではあるが、人類の歴史を通じて見られる社會の生産力發展の大體の姿である。これも當然のことだが、生産要件の進歩發達は、生産と關係を持つ人間によつて實現されるのであつて、人間と關係なく行はれるのではない——従つて生産要件の變化發達につれて、生産力の最も重要な要素たる人間も變化發達し、人間の生産的經驗、彼等の勞働熟練、生産要件を用ひる彼等の能力も變化し發展して行つたのである。

歴史を通じて見られる社會の生産力の變化發達につれて——人々の生産関係も、彼等の經濟關係も變化し發達して行つた。

歴史上には五つの主要な型の生産關係が見られる。原始共產制生産關係、奴隸制生産關係、封建制生産關係、資本主義生産關係、社會主義生産關係がこれである。

原始共產制度の下では、生産手段の共有といふことが生産關係の共有といふことが、生産關係の基礎である。これは大體にその時代における生産力の性質と一致してゐた。石器や次に出てきた弓矢では、一人一人で自然力や野獸と闘ふことは出来なかつた。森へ行つて木の實を集めたり、水中の魚を捕つたり、住居らしいものを建てたりするには、人々は一緒に働き合つて、餓死を免れ、野獸や附近の聚落の犠牲とならないやうにせねばならなかつた。一緒に働き合つたので、生産手段は共有となり、生産物も共有であつた。そこにはまだ生産手段の私有といふものはなかつた。もつとも、生産要具は同時は野獸を防ぐ道具であつたから、或種の生産要具の私有はあつたかも知れない。そこにはまだ搾取といふことも、階級といふものもなかつた。

奴隸制度の下では、奴隸主が生産手段を所有し、同時に生産に従事する者、すなはち奴隸を所有してゐることが、生産關係の基礎である。奴隸主は奴隸をまるで家畜のやうに賣つたり買つたり、殺したりすることが出来る。かういふ生産關係は、大たいにその時代における生産力の状態と一致してゐた。今では人々は、石器の代りに鐵器を用ひるやうになり、牧畜も農業も知らない見すばらしい原始的狩獵經濟の代りに、牧畜、農業、手工業が起り、これらの生産部門の間に分業が出来、各個人や各聚落の間に生産物の交換が行はれるやうになり、少數の者が富を積むやう

になり、生産手段は實際に少數者の手に集まり、多數者が少數者に従屬して、多數の者が奴隸とされるやうになつた。そこにはもはや、生産過程における社會全員の自由なる共同労働といふものはなく——そこに専ら行はれたのは、働かない奴隸主に搾取される奴隸の強制労働である。故に生産手段の共有もなければ、生産物の共有もない。共有に代つて私有財産が起つた。そこでは奴隸主が一番の大分限者であつた。

富める者と貧しき者、搾取する者と搾取される者、全權を揮ふ者と何一つ權利を持たぬ者、この兩者間の激しい階級闘争——これが奴隸制度の姿である。

封建制度の下では、領主が生産手段を所有し、奴隸のやうに身ぐるみではないが、生産に従事する者、すなはち農奴を所有してゐることが、生産關係の基礎である。領主はもはや農奴を奴隸のやうに殺すことは出来ないが、農奴を賣つたり買つたりすることは出来る。領主の所有の外に、農民や手工業者も、それぞれ一個人として生産手段を所有し、個人労働に基づく私經濟を所有してゐる。かういふ生産關係は、大たいにその時代における生産力の状態と一致してゐた。鐵の熔解や加工がさらに改良せられたこと、鐵犁と織機が普及したこと、農業、園藝、葡萄栽培、バター製造が一層發達したこと、手工業仕事場の外に、問屋手工業企業が出現したこと——これが生産

力の状態の性格的特徴であつた。

新しい生産力は、働く者が或種の生産上の創意を持ち、働かうとする意欲を持ち、労働に関心を持つことを要求した。従つて領主は、労働に関心を持たない、全然創意のない労働者だつた奴隷を見捨てて、農奴を對手とするやうになつた。その農奴は自分自身の經濟を持ち、生産要具も所有してゐて、土地を耕やしては、自分の得た收穫の中から現物で領主に支拂ふのに必要なだけの労働に對し、幾分かの關心を持つてゐたのである。

私有財産は封建制度の下で一段の發達をとげた。搾取はひどくて、奴隸制度時代と大して變らず、幾らかゆるくなつただけである。搾取する者と搾取される者との階級闘争は、封建制度の根本特徴をなしてゐた。

資本主義制度の下では、資本家が生産手段は所有してゐるが、生産に従事する者、すなはち賃労働者を所有してゐないことが、生産關係の基礎である。賃労働者は人身上の支配を受けないので、資本家は賃労働者を殺したり、賣つたりすることは出来ないが、しかし賃労働者は生産手段を持つてゐないので、餓死しないためには、自分の労働力を資本家に賣つて、搾取の負擔を身に受けねばならぬ。生産手段に對する資本家の所有と並んで、農奴の隸屬的境遇から解放された農

民や手工業者が、個人的労働に基づく生産手段を私有してゐて、最初の間はこの種の私有が廣く普及してゐた。手工業仕事場や問屋制手工企業に代つて、機械を備へつけた大工場や大作業場が起つた。原始的な農具で耕作する貴族風の莊園に代つて、農業技術を基礎とし、農業機械を備へつけた資本制大農經濟が起つた。

新しい生産力は、生産に従事する者が、虐げられた無知蒙昧の農奴よりも文化的で物分りがよく、機械に通じて、機械が旨く動かせるやうになる事を要求した。故に資本家は、農奴制の束縛から解放された賃労働者を、機械が旨く動かせる程に文化的な賃労働者を對手とする様になつた。ところが、資本主義も生産力を大々的に發達させるに及んで、資本主義には解決できない矛盾に落ちこんでしまつた。資本主義は絶えず商品の生産をふやしては、商品の値段を引下げて行き競争をはげしくして、澤山の中小業者を零落させ、彼等をプロレタリアと化してしまひ、彼等の購買力を減少させ、そのために、折角生産した商品を賣ることが出来なくなる。ところが、資本主義は絶えず生産を擴大し、大工場や大作業場に數百萬の労働者を集めて、生産過程を社會的なものとなすので、そのために、それ自身の基盤を掘りくづしてゆく。生産過程の社會的性質は、しきりに生産手段の社會有を要求するのに、生産手段の所有は相變らず、生産過程の社會的性質

と兩立しない、資本家の個人所有となつてゐるからである。

かうした生産力の性質と生産関係との解けない矛盾は、生産過剰の週期的恐慌となつて現はれる。恐慌となると、人口大衆は資本家のためにすでに零落させられてゐるので、資本家は購買力のある需要が見つからず、生産物を焼き棄てたり、折角作られた商品を破棄したり、生産を停止したり、生産力を破壊したりせねばならぬ。恐慌となると、數百萬の人口は、商品が足りないからではなく、商品があまり多く生産されるために、失業と飢に苦しまざるを得ないのである。

これは、資本主義生産関係が社會の生産力の状態と一致しなくなり、生産力と解けがたい矛盾に陥つたといふことを意味する。

これは、資本主義が革命の危機を孕み、生産手段に對する今日の資本主義的所有に代ふるに、社會主義的所有を以てすることを使命とする、革命が目前に迫つてゐるといふことを意味する。

これは、搾取する者と搾取される者との熾烈な階級闘争が、資本主義制度の根本特徴をなしてゐるといふことを意味する。

社會主義制度は今のところソヴェト聯邦だけに實現されてゐるが、この社會主義制度の下では生産手段の社會有といふことが、生産関係の基礎である。この制度の下では、搾取する者も、搾

取される者もゐない。「働かざる者は食ふべからず」といふ原則に従つて、生産された物が労働を標準に分配されてゐる。そこでは、生産過程における人々相互の関係は、搾取を受けない労働者の友愛に満ちた共働の関係、社會主義的相互扶助の関係となつてゐる。そこでは、生産関係が生産力の状態と完全に一致してゐる。生産過程の社會的性質が、生産手段の社會有といふことで裏づけられてゐるからである。

故に、ソヴェト聯邦における社會主義的生産には、生産過剰の週期的恐慌もなければ、この恐慌に伴ふ馬鹿げた事も起らない。

故に、ソヴェト聯邦では生産力は加速度的なテンポを以て發展してゐる。生産関係は生産力に一致してゐて、生産力が加速度的に發展する十分な餘地を與へてゐるからである。

以上が、人類の歴史を通じて見られる人間の生産関係の發展像である。

かういふ風に、生産関係の發達は社會の生産力の發展に、先づ第一に生産要具の發展に依存してゐるので、そのために、生産力の變化發達は、早かれおそかれ、それに應じた生産関係の變化發達をきたすこととなる。

マルクスはかう言つてゐる——「労働機關（註）を使用し創造することは、すでに或種の

動物もその萌芽を具へてゐるとはいへ、特に人間の労働過程の特徴をなすものである。それ故にフランクリンは人間を定義して、『道具を造る動物』だと云つてゐる。この世にゐなくなつた動物種の組織を研究するには、遺骨の構造を知ることが重要であるが、これと同じく、亡び去つた経済的社會構成を研究するには、労働機關の遺物を知ることが重要である。經濟上の各時代を區別するものは、何が造られるかといふことではなく、何によつて、如何にして造られるかといふことである、労働機關といふものは、人間労働力の發達を示す分度器たるばかりでなく、労働の社會的關係の指針器でもある」(マルクス「資本論」第一卷、エンゲルス版、一四二頁)。

註 マルクスは「労働機關」といふことを主として生産要具といふ意味に解してゐる。——スターリンさらに曰く——

「社會關係は生産力と密接な關係がある。人間は新しい生産力を獲得しつゝ、その生産様式を變へてゆくが、生産様式の變化、彼等自身の生活の保全法の變化と共に、社會關係全體を變化させてゆく。手曰があれば、領主を頭にいただく社會であり、蒸汽製粉機があれば、産業資本家を頭にいただく社會である」(マルクス・エンゲルス全集、第五卷、三六四頁)。

「生産力増進の運動、社會關係の破壊、觀念の發生は不斷に行はれてゐるが、不動不變なのは運動といふ抽象だけだ」(同上、三六四頁)。

エンゲルスは「共産黨宣言」の中に定式づけられた歴史唯物論の特質を述べて、次のやうに言つてゐる——

「それぞれの歴史時代における經濟的生産と、それから必然的に生ずる社會の構造とか、その時代の政治史および思想史の基礎をなすものである……それにつれて、原始的土地共有の崩壊以來、およそ歴史といへば階級闘争の歴史であり、社會的發展のそれぞれ異なる段階における、搾取される階級と搾取する階級、支配される階級と支配する階級との闘争の歴史であつた……今日では、この闘争が究極の段階に達して、搾取され壓迫される階級(プロレタリア)は、同時に全社會を搾取・壓迫・階級闘争から永久に解放するのでなければ、もはや彼等を搾取し壓迫する階級(ブルジョアジ)から解放されることが出来なくなつた……」(「共産黨宣言」、ドイツ版へのエンゲルスの序文)。

生産といふことの第三の特質は、新しい生産力とそれに即應する生産關係の發生とが、舊來の制度とは別個に、舊來の制度の消滅後に起るのではなく、舊來の制度の胎内で發生するといふこ

と、豫め意圖された、人間の意識的活動の結果として發生せず、自主的に、無意識的に、人々の意志とは係りなく發生するといふ點にある。新しい生産力と生産關係の發生は、次の二つの理由から、人間の意志とは係りなく自主的に起るのである。

第一、人間は生産様式をあれこれと選ぶ自由を持たないからである。といふのは、新しい各世代が生活を始めると、そこにはすでに、既往の世代の労働の結果としての、既存の生産力と生産關係とがあり、そのために、新しい世代は初めの間は、生産の領域に見出されるのを、すべて既存のまゝに取り入れ、それに順應して、物質財を生産し得るやうにせねばならないからである。

第二、人間はあれこれの生産要具に改良を加へ、あれこれの生産力の要素を改良してゆきながら、かういふ改良がどんな社會的結果をきたすかといふことは意識せず、その結果がわからず、こんなことは考へてもみず、日々の自分の利益のことばかり考へ、自分の労働を樂にし、直々自分のために手つ取りばやい何かの利益を得ることばかり考へてゐるからである。

原始共產社會の或る成員たちが、段々に手さぐりで、石器から鐵器へと移つて行つたとき、もちろん彼等は、この新奇な事柄がどんな社會的結果をもたらすかといふことは知らず、そんなことは考へてもみなかつた。鐵器へ移つて行くことが、生産上の變革を意味することも、それが結

局は奴隸制度へ向つてゆくことも、彼等には分らなければ、さういふことを意識しなかつた。彼等は自分の労働を樂にし、手近かな利益を得ることばかり考へてゐたのである——彼等の意識的活動は、かうした自分一人の日々の利益といふ狭い範囲にかぎられてゐたのである。

封建制度の時代に、歐洲の若きブルジョアが、小さな手工仕事場の外に、問屋制手工企業を建て始め、かくして社會の生産力を前進させたとき、もちろん彼等は、この新奇な事柄がどんな社會的結果をもたらすかといふことは知らず、そんなことは考へてもみなかつた。この「瑣々たる」新奇な事柄が社會勢力の離合集散をきたし、行く行くは革命に終つて、ブルジョアがその恩寵をいたくありがたがつた王權も、彼等の最良の代表者でさへその仲間にはいりたがつた貴族も、結局は倒れてゆくものなどとは、彼等は意識せず、またこんなことが分りもしなかつた——彼等は商品生産を安くし、アジアの市場や、發見されたばかりのアメリカの市場に、出来るだけ多くの商品を賣り出し、成るだけ多くの利潤を得ることばかり考へてゐたのである——彼等の意識的活動は、かうした日々の生活の狭い範囲にかぎられてゐたのである。

ロシアの資本家が外國の資本家とぐるになつて、機械化された現代的大工業をロシアに盛んに設立し、ツァーリズムはそつとして置いて、農民を大地主の餌食に供したとき、もちろん彼等は、

この生産力の大増進が、どんな社會的結果をきたすかといふことは知らず、そんなことは考へてもみなかつた。社會の生産力の領域におけるこんな一大飛躍が、社會勢力の離合集散をきたし、そのためにプロレタリアが農民階級と結んで、社會主義革命に勝利をとげるやうになるなどは、彼等は意識もせず、またこんなことが分りもしなかつた。彼等は工業生産を出来るだけ擴張して、廣大な國內市場を手に入れ、獨占資本家となつて、國民經濟から出来るだけ多くの利潤をしめあげることはかり考へてゐた——彼等の意識的活動は、日々の狭い實利上の關心以上には出でなかつた。これについてマルクスはかう言つてゐる——

「人類はその生活の社會的生產において（すなはち、人類の生活に必要な物質財の生産において——スターリン）、彼等の意志に係りのない（傍點はスターリン）、特定の必然的な關係、彼等の物質的生產力の一定の發展段階に照應する生産關係を結ぶ」（マルクス選集、第一卷、二六九頁）。

しかしこれは、生産關係の變化、舊い生産關係から新しい生産關係への推移が、何んの衝突も磨擦もなく、すらすらと圓滑に起るといふ意味ではない。むしろ反對に、舊い生産關係から新しい生産關係への推移は、通常、舊い生産關係の革命的轉覆と新しい生産關係の設立とによつて生

ずるのである。或る時期まで、生産力の發達と生産關係の領域における變化とは、人々の意志に係りなく自的に行はれる。しかし、これは或る瞬間までのことである、一旦發生して、發展しゆく生産力が、然るべく成熟するに至るまでのことである。一旦新しい生産力が成熟すると、現存の生産關係とその擔ひ手たる支配階級とは、「克服しがたい障害」と變ずるので、この障害は新興階級の意識的活動によつて、新興階級の暴力的運動によつて、革命によつてのみ、初めて取り拂はれるのである。この點に、新しい社會思想、新しい政治制度、新しい政治權力の絶大な役割が特に明瞭に現れるのであつて、その使命とするところは、舊來の生産關係を力づくで廢棄することである。新しい生産力と舊い生産關係との相剋を基礎とし、社會の新しい經濟的要講を基礎として、新しい社會思想が起り、この新思想が大衆を組織し動員し、大衆は新しい政治軍に結集されて、新しい革命權力を創り、この權力を用ひて、生産關係の領域における舊秩序を力づくで廢棄し、新しい秩序を設立する。自主的な發展過程は、人々の意識的活動に席を譲り、平和な發展は、暴力的變革に席を譲り、進化は革命に席を譲る。

マルクスはかう言つてゐる——「プロレタリアはブルジョアと闘ひながら、必然的に團結して階級となり……革命を経て支配階級となり、支配階級として舊來の生産關係を暴力を

以て廢棄する」〔共產黨宣言〕、一九三三年版、五二頁。

さらに曰く――

「プロレタリアはその政治的支配を用ひて、ブルジョアから一步々々とするすべての資本をもぎ取り、一切の生産機關を國家の手に、すなはち支配階級として組織されたプロレタリアの手に集め、生産力の總量を出來るだけ急速に増加する」(同上、五〇頁)。

「舊社會が新社會を孕んでゐる時は、いつでも暴力が舊社會の産婆である」(マルクス「資本論」第一卷、一九三五年刊、六〇三頁)。

マルクスは一八五九年その名著「經濟學批判」の歴史的「序文」の中に、歴史唯物論の本質に關する天才的定式を與へてゐる。

「人類はその生活の社會的生產において、彼等の意志とは係りのない、特定の必然的な關係――彼等の物質的生產力の一定の發展段階に照應する生産關係を結ぶ。この生産關係の總體は、社會の經濟的構造、眞實の土臺をなすもので、この土臺の上に、法制上および政治上の上部構造が聳え立ち、一定の社會的意識形態がそれに照應してゐる。物質的生活の生産様式が、社會的、政治的および精神的生活過程一般を條件づける。人間の意識が彼等の存在を決

定するのではなく、むしろ反對に、人間の社會的存在が彼等の意識を決定するのである。社會の物質的生產力が或る發展段階に達すると、それは現存の生産關係と矛盾するに至る、又は――現存の生産關係の法制的表現にすぎないのだが――生産力が從來その内部で發達してきた所有關係と矛盾するに至る。現存の生産關係は生産力の發展形式から一變して、却つて生産力の桎梏となる。その時、社會革命の時代が到來する。經濟的基礎の變動と共に、巨大な上部構造全體が或ひは徐々に或ひは急激に轉換する。かかる轉換を考察するに至つては、自然科学的に精密に確められる、經濟的生產條件に生ずる物質的轉換と、法制的、政治的、宗教的、藝術的又は哲學的觀念形態、これを要するに、人々がこの相剋を意識して、それを解決せんとするイデオロギー形態とは、これを必ず區別すべきである。一個人が如何なる人物であるかを見るのに、その人が自分のことをどう考へてゐるかといふことで判斷してはならないやうに、かかる轉換期もその時代の意識から判斷すべきではなく、むしろ反對に、その意識は、物質的生活の矛盾から、社會的生產力と生産關係の現存の相剋から、これを説明すべきである。およそ如何なる社會的構成體と雖も、生産力といふ生産力がまだ發達せず、當の社會的構成體が生産力のためにまだ十分の餘地を残してゐる間は、決して没落するもの

でなく、また、新しいより高次の生産關係は、そのものの物質的存立條件が舊社會自身の胎内で孵化し終る以前には決して出現しない。故に人類は常に自ら解決し得る問題のみを提出するのである。何故と云へば、仔細に觀察してみると、いつでも、問題解決の物質的條件がすでに存在してゐるか、又は少くとも生成の過程にある時に、初めて問題そのものが起るといふことが分つてくるからである」(マルクス選集、第一卷、二六九―二七〇頁)。

マルクス主義の唯物論を社會生活に適用し、社會の歴史に適用して見ると、その唯物論は以上の如きものとなる。

譯者	廣島定吉
發行者	山田松太郎
印刷者	中村 紳
印刷所	新興印刷製本株式會社
配給元	日本出版配給株式會社
發行所	新興出版社

東京都小石川區林町四三
埼玉縣比企郡大岡村上岡
埼玉縣比企郡大岡村上岡
東京都神田區淡路町三ノ九
東京都小石川區林町四三
電話大塚(36)一二五八番
振替東京一一六六二七番

昭和二十一年九月二十日 印刷
昭和二十一年九月廿五日 發行

譯者檢印



歷史唯物論

定價貳拾圓

日本出版協會會員番號A二一九一〇七

新興出版社新刊・近刊(*は既刊)

* 徳永直・渡邊順三共著	唯物辯證法讀本	15.00	送 3.00
* 廣島定吉譯・ソ聯百科版	辯證法的唯物論	28.00	送 3.00
* 廣島定吉譯・ソ聯百科版	歴史唯物論	20.00	送 3.00
* 市川泰次郎著	戦後の世界政治動向	3.50	送 20
青年のための叢書(日本青年共産同盟編)			
* 服部・藤原共譯	青年運動の理論と歴史	3.50	送 50

新日本名作叢書(徳永直・中野重治・壺井繁治編)

* 徳永直著	働く歴史	13.00	送 2.00
* 小林多喜二著	1928・3・15 黨生活者	13.00	送 2.00
* 佐多稲子著	キヤラメル工場から	13.00	送 2.00
* 中野重治著	鐵の話	13.00	送 2.00
壺井繁著	大根の葉		
橋本英吉著	棺と赤旗		
江口渙著	山茶花の家		
下村千秋著	街のルンペン		
宮本百合子著	貧しき人々の群		

新日本歌人協會編 子規短歌選集

渡邊順三・矢代東村共著 啄木の歌と鑑賞

* 新日本歌人協會編 啄木短歌選集

送料共 4圓

人民短歌叢書

* 土岐善麿歌集	夏 草	9.00	送 1.00
* 松岡辰雄歌集	新生に題す	8.00	送 1.00
* 渡邊順三歌集	新らしき日	8.00	送 1.00
矢代東村歌集	早春		
内田穰吉歌集	闘ひの獄室		
佐々木妙二歌集	診療		
坪野哲久歌集	一 樹煙		
中野菊夫歌集	噴		

* 月刊 人民短歌(新日本歌人協會編輯) 月 4圓 送 20 年 48圓

33.3.4



